

華僑送金の広域間接続関係
シンガポール・香港・珠江デルタを例に *

久 末 亮 一 **

Connection Mechanisms for Chinese Remittances:
From Singapore to the Pearl River Delta via Hong Kong *

HISASUE Ryoichi **

Overseas Chinese have been an important factor in the modern Asia-Pacific economy. Since the middle of the nineteenth century, remittances by overseas Chinese have gradually influenced the economy of the region; they have been important not only in amount but also in the effect of their multiple uses for trade and investment. In the latter sense, remittances by overseas Chinese have had a huge impact.

Geographically, remittance funds flowed from throughout the Asia-Pacific to South China via Hong Kong. For example, Cantonese remittance houses in South East Asia, the Americas, and Oceania remitted funds to Hong Kong, from where they were retransferred to the Pearl River Delta. Such funds were used for purchase or investment in Canton or in other Chinese cities through the Cantonese networks. This is just one example. Each Chinese group had different routes and means of remittance but all funds, with different objectives, crossed paths in Hong Kong.

This paper focuses mainly on the connection mechanisms of Cantonese Chinese remittances from Singapore to the Pearl River Delta via Hong Kong.

Keywords: Chinese remittances, Overseas Chinese, remittance houses, native banks, rice trade, Singapore, Hong Kong, Cantonese, Eu Yan Sang

キーワード: 華僑送金, 華僑, 信局, 銀号, 米貿易, シンガポール, 香港, 広東系, 余仁生

- * 本稿では社店名・人名などの固有名詞には繁体漢字を用いている。
本稿での「広東」とは、主に珠江デルタ流域圏を指す。「潮州」は行政区分的には広東省の一部であるが、明確な言語的・風習的異同から、実際には華僑・華人社会でも、「珠江デルタ流域圏」とは異なる独自の郷党として認識されている。このため本稿でも「広東」と「潮州」を区別する。
- ** 東京大学大学院総合文化研究科; Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902, Japan

はじめに

19世紀半ば以降，華南から香港を経由して，米州，東南アジア，オセアニアなど，アジア太平洋地域に大量の移民が送出された。¹⁾ この結果，華南とアジア太平洋各地の間には，華僑・華人の経済活動に伴い，人・物資・資金・情報などが流動・循環する。

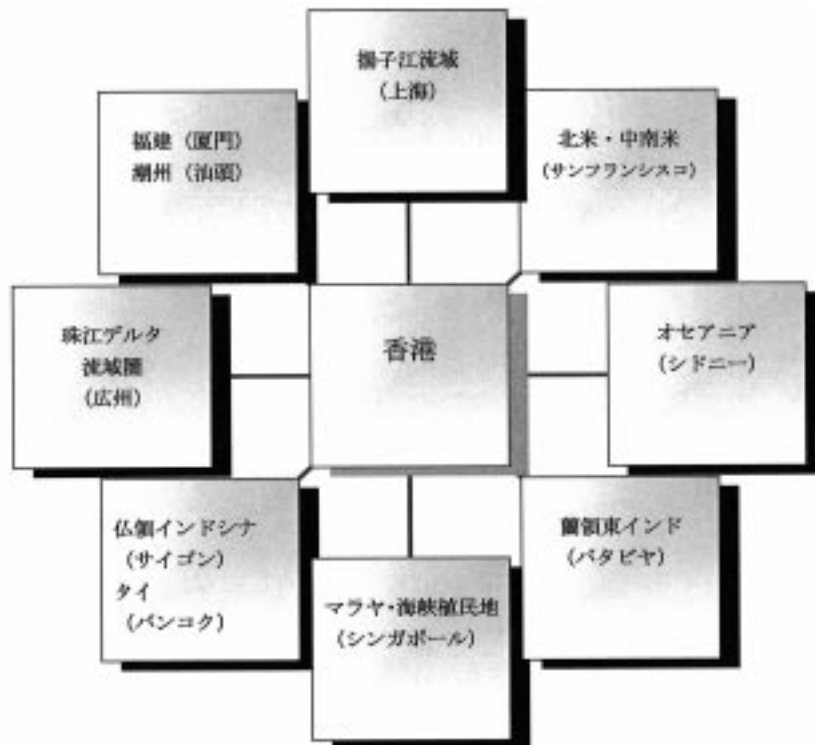


図1 アジア太平洋広域経済圏の概念図

出所：筆者作成。

人・物資・資金・情報などの流動・循環は，図1のような地域間の接続関係を形成した。諸地域には珠江デルタ流域圏の広州，マラヤ・海峽植民地のシンガポール，仏領インドシナのサイゴン，タイのバンコク，米大陸のサンフランシスコ，オセアニアのシドニーなどのように，地域内を集積する「地点」がある。そして，各地域を背景とした各地点間は，香港の集散・調節機能を通じて相互に結ばれた。

このように，華僑・華人の経済活動を一つの軸として地域間の接続関係が構築され，その間に様々な要素が流動・循環を繰り返す「回路」が形成されたことは，近代アジア太平洋の経済

1) 1851年の項目には，香港からの移民中継拡大が特記事項として明記されている [HKG 1932: 7]

圏を特徴付けるものであった。

そして、この「回路」を流動・循環した要素の一つが、「華僑送金」である。華僑送金は、地理的にはアジア太平洋各地から、主に香港を経由して、華南を結ぶ資金移動であった。例えば、「サンフランシスコ 香港 珠江デルタ」「バンコク 香港 潮州」といった移動方向である。しかもそれは、途中で貿易・金融・投資などに複合利用され、時々によって最も有利で効率的な経路・担い手・送金方法が選択されながら接続されていた。

それ故に華僑送金は、単なる送金にとどまることなく、アジア太平洋地域の多角的な為替関係に影響を与えた。そして総体的な金融規模の影響力だけではなく、広域間での人・物資・資金・情報といった諸要素の流動・循環と連動した複合性・複雑性からも、華僑・華人が展開した経済活動のダイナミクスを象徴する現象であった。

華僑送金の大枠や意義は、すでに濱下武志によって説明されている[濱下 1990; 1992; 1996]、筆者はほぼそれに同意するものである。問題は、最後の解が同じであったとしても、途中で纏れ合った系のような関係が、全て解明されているわけではない、という点である。

筆者は、近代の華南経済が世界市場に包摂され、アジア太平洋で華僑・華人の経済活動が展開する様子を研究しており、以前には、北米 華南間という東西の軸を接続した広東系華僑・華人の送金ネットワークを考察した[久末 2004]。こうした成果を、潮州系や福建系などの送金事例と並列して重層的に考察すると、異なる系統・主体の華僑送金のネットワークが、異なる経路や方法、あるいは資金の役割を持ちながら、相互に交錯しつつ、流動・循環する姿が立体的に浮かび上がる。

例えば、潮州系華僑・華人が「南北行」の米貿易と送金をリンクさせた動き、広東系華僑・華人が「金山荘」の貿易と送金をリンクさせた動き、同じく広東系が送達した資金が珠江デルタ流域圏の輸入物資消費力となり、あるいは広東各地や上海などへ投資資金として向かった動きなどが、香港で交錯・連動して調整・決済される、といった構図である。

華僑送金という事象は、戦前から注目されてきた。しかし、アジア太平洋の広域経済圏という「回路」の中で、纏れ合った系が織り成していた全容は、未だ解明されていない。解を得るには、それを一本ずつ解き解すような作業が必要となる。

本稿では、19世紀後半から20世紀初頭、東南アジアの一大集散地であったシンガポールから、アジア太平洋全体の中継地であった香港を経由して、広東の珠江デルタ流域圏へ向かった南北軸の資金流動を例に、引き続き広東系を中心とした華僑送金の接続関係の解明を試みる。²⁾

2) 本稿は華僑送金の数量的分析に重点を置くものではない。華僑送金には見えない活動に伴う部分が多くあり、正確な統計的把握が困難である。ただし大体の数量を一例として示すと、1864～1948年の全国華僑送金総額は35億1,300万USドル、広東向け華僑送金総額(潮州、海南を含むと推定)は28億6,590万USドル、全国総額に占める広東向け総額の比率は約81.6%に上る[林 1980(林・羅・陳・潘・何 1999: 101に転載)より筆者計算]。華僑送金の数量的分析に関しては[林・羅・陳・潘・何 1999]を参照。

そのための資料として、主に20世紀初頭の台湾銀行による調査報告書を用いる。³⁾

I 華僑送金の前段階 シンガポールの信局を例として

1913年の推計（表1）に拠れば、華僑・華人の人口は東南アジア各地とオーストラリアのみで約340万以上と言われた。また出身地を見ると、明らかに広東、潮州、福建の華南3地域が圧倒的な割合を占めていた。その意味で華僑送金とは、アジア太平洋の各地から華南3地域へ向う資金移動を基本としていた。

華僑送金には様々な方式があった（図2参照）。例えば1860年代頃までは、手荷物による現

表1 東南アジア各地とオーストラリアの華僑人口（推定，1913年）

地方	総計	広東	潮州	福建
タイ	127万	14万	95万	12万
海峡植民地，マラヤ，ボルネオ	97万	21万	25万	39万
ジャワ，スマトラ，セレベス，蘭領諸島	51万	7万	16万	28万
仏領インドシナ	20万	9万	7万	3万
フィリピン	20万	2万	1万	16万
オーストラリア	14万	11万	不明	不明
ビルマ	12万	不明	2万	8万
独領南洋諸島	8万	2万	4万	2万

出所：台湾銀行調査課 [1914: 2-3, 23-29] より筆者作成。



図2 華僑送金の送金方式

出所：[林・羅・陳・潘・何 1999: 5]

金・貴金属輸送が主流であった。しかし需要の増加に伴い、次第に組織的な送金網が整備された。ここではシンガポールを例に、華僑送金の端緒となる部分を考察する。

シンガポールは東西交易要衝としての地理的位置に加え、マレー半島や蘭領東インドでの華僑・華人の経済活動に伴い、19世紀後半から移民・送金・貿易などの集散・中継地となる。その過程で、シンガポールは香港との間に連動関係を形成することで、華南と接続された。このためマレー半島全域や蘭領東インドの一部から華南への華僑送金は、先ず東南アジア側の集散・中継地であったシンガポールに集積された。

ここで重要な役割を果たしたのは、現地の華僑・華人社会から現金や郵便物を預かり、華南への配送手配をおこなう業者であった。これが信局である。⁴⁾

シンガポールの信局は、広東、潮州、福建など各郷党のものがあつた。1887年には49軒、1913年には200軒余りが活動していた。中でも広東系で著名な店は「余仁生」を筆頭に「三益」「廣蘭」「周蘭記」「福源」「廣祥泰」「廣福成」「廣生隆」「謝怡和」「廣恒」「廣祥」「怡盛」「廣泰」「瓊源豊」「恒裕成」「綸章」「永吉安」他50数軒があつた〔台湾銀行調査課 1914: 116〕

多くは華商の伝統的な共同出資形態である合股によって成立していたが、信局業務を専業とする店は少なく、実際はほとんどが貿易業や商店など各種商業活動との兼業で営まれていた。⁵⁾ 逆説的には、それは市中では信局でなく、主に貿易商や商店として知られており、「信局業務を兼業している」と看做されていたとも考えられる。この例は、シンガポールと香港で華商の巨頭として知られた余東璇の経営した「余仁生」に見ることができる。

「余仁生」は広東省仏山出身の余廣により、漢方薬店としてマレー半島のペラ州ゴペンで1879年に創業された。1897年、長子の余東璇が事業を継承し、南洋華僑社会でも屈指の薬業業者に成長する。⁶⁾ 支店網は海峡植民地・マラヤ各地に拡大し、1909年には香港支店⁷⁾ 1910年代には広州や仏山など広東各地に支店を開設した。

- 3) 台湾銀行は1910年代から1920年代にかけて、中国南部や東南アジア各地に関する調査報告書を数多く作成している。これは当時の台湾銀行が、台湾開発のための金融機関にとどまらず、「南進論」思潮の影響もあり、アジア全体への広域進出を志向していた表れでもある。特に中国南部から東南アジアという地域、さらには華僑送金への言及が多いのは、先行していた香港上海銀行のような欧州系海外銀行が、同地域を結ぶ中国系経済活動を大きな市場基盤とすることで、影響力を持っていたためである。
- 4) 最も原初的な華僑送金の方法は、本人あるいは同郷者の帰国に際して紙幣などを携帯する方法である。また「客頭」と呼ばれた移民ブローカーが、東南アジアと華南各地を往来する際に委託する方法もあった。しかし中には、不正をおこなって資金を着服する者もいた。このため信局が最も利便性に優れ、信用される機関へと成長した。
- 5) 例外であったのは、本店を華南に有し、支局を東南アジア各地に展開した「天一局」(本店廈門)、「悦仁」(同廈門)、「和成」(同汕頭)のような信局専業者であった。
- 6) 同時に余東璇は錫鉱山やゴムプランテーション業への投資でも成功を収める。
- 7) 1927年、余東璇は本店をシンガポールから香港に移転し、自身も香港に居を定める。



写真1 「余仁生」シンガポール本店の門柱にある看板

左：「人參・鹿の角・燕の巢・肉桂 本場名産の薬材」

右：「広東・広西向け送金 各都市の貨幣」

出所：2006年9月筆者撮影

「余仁生」は漢方薬の輸出入・製造販売で知られていたが、同時に支店網を利用して信局業務を手掛けた大手でもあった。すなわち「余仁生」は、同一店内で薬業と信局業を営んでいた。

貿易商や商店が信局業務を手掛けた背景は、華僑・華人社会には華南への送金需要が大きかったにもかかわらず、当時は遠隔地間金融を実行できる華人系金融機関の成立条件が整っていなかったことが挙げられる。そこで、地元の華僑・華人社会で資本・信用力が比較的優位にあった大商店が、次第に金融業務を兼業したと考えられる。⁸⁾

以上のように一定規模の信局は、同時に著名な貿易商や商店でもあったため、自己の支店あるいは聯号⁹⁾を華南各地に有していた。しかし、地方の小規模な信局の場合、シンガポールまでの接続が限界であった。そこでシンガポールの「余仁生」や「天一局」のような大手信局は、支店のあるペナンやマラッカなど以外のマレー半島各地¹⁰⁾さらにはスマトラ、ボルネオ、ジャワなど各地の小規模信局や為替取扱い商店の注文も取り次いだ〔同上書：118〕。こうしてシンガポールは、華南に対する為替の一大中継地として機能した。

8) 同じ現象は他地域の華僑・華人社会に見られる。例えば北米の華僑・華人社会では、資本と信用を兼ね備えて華南・北米間を結び、「金山荘」と総称された広東系貿易業者が、華南への華僑送金仲介を手掛けていた。

9) 事業活動を円滑化するため、同族・同郷・同業などの社会的関係を軸に提携・連合関係を結ぶ、半独立・独立した華商の事業体。ただしそれらの関係は、必ずしも資本関係を伴うものではない。

10) ペナンやマラッカの小信局も、シンガポールの大手信局に再送を委託した。

II 信局送金の実際

シンガポールの信局の様子は、1914年の台湾銀行の報告書に次のように記述されている。

軒を並べ「銀信局匯兌」の看板を出せり其の数多きこと他地方に見ることを得ざる所なり其の信用の大なるものに至りては店頭顧客絶ゆることなく出入（中略）顧客を見るに船頭あり、護謨園夫あり、車夫あり、鉄工あり、商人ありて現金を提供して送金を依頼するあり領収証を示して回批を請求するあり而して一方には数百通の手紙を堆積し帳簿に付込するあり或は回批を原簿に対照するあり或は回批を函筆中に探ぐるあり宛然一個の郵便局の如く又為替屋の如く（後略）[同上書: 115]

以上からは、シンガポールの信局店頭の繁忙が窺い知れる。また同時に、信局が郵便業務を兼業していた様子もよく判る。

華僑・華人が故郷への送金を必要とするとき、あるいは故郷との連絡を必要とするとき、彼らは自身の郷党が経営する信局へ向かう。顧客が同郷人の経営する店を選択するのは、その店が送信・送金の目的地である郷土と連絡可能なことに加え、同郷という紐帯が華僑・華人社会では相互信用のメカニズムとして機能していたためである。

送金の際に、顧客は信局で送金額分の現金を渡して、信局の領収証を受け取る。送金受託時の為替レートは、シンガポールではほとんどが英系の香港上海銀行の提示レートを参考にしており、この銀行の価格と顧客に提示される価格とのスプレッド（価格の開き）が店の取り分となった。¹¹⁾

また手紙を預けた場合、信局はこれを整理登録した後に、外国郵便局のネットワークを利用して支店・聯号に送付した。無論、華南で郵便制度が確立されたのは20世紀に入ってからであり、その信頼性も薄かった。したがって郵便制度というマクロ・インフラによって手紙が送達されたのは、基本的に外国郵便システムが延伸していた開港場までである。

信局が送金を受託した場合、華南への送金という中段階には二つの手段があった。一つは外国郵便局の郵便為替を利用する方法である。華僑は郵便為替をオーストラリアや英領ビルマでは積極的に活用したが、シンガポールやマレー半島ではほとんど利用していなかった [HKG 1883]。理由として、1883年の香港郵政総局報告書は次のように述べている。

11) 1913年の廈門向送金を例にすれば、香港上海銀行の廈門向為替相場がメキシコドル建て100 = 海峡ドル118.50に対して、信局は121.50を提示した。すなわち3海峡ドルのスプレッドを利益として上乗せしていた。無論、送金額が小口になるほど、スプレッドは拡大した [台湾銀行調査課 1914: 104]

おそらく理由は、2つの植民地（筆者注：香港と海峡植民地）の密接な華人社会間の商業関係が、彼ら自身による送金手配を可能にさせているものと考えられます。[*ibid.*]

たしかにシンガポール 香港間は、密接な華人の商業ネットワークで結ばれていた。加えて、すでに1870年代半ばには、華南への送金事業は華僑・華人社会の中で巨大な利権となっており、両地の末端での資金集散は華僑・華人がほぼ完全に掌握していた。¹²⁾

しかし実際の遠距離間の送金には、外国銀行の為替送金が活用された。例えば送金額の多い場合、香港などの聯号に電信であらかじめ金額を傳達し、郵便が到着する前日頃に外国銀行へ赴き、手持ちの注文金額をまとめて電信為替で送金した。この他、金額の少ない場合には為替手形を組み、手紙と共に直接送付することもあった [台湾銀行調査課 1914: 105]

信局の銀行利用の例を、1913年の台湾銀行シンガポール支店での香港宛為替に見ると、それぞれ広東系の信局である「三益」が30万海峡ドル、「福源」が30万海峡ドル、「余仁生」が25万海峡ドル、「周蘭記」が20万海峡ドルとなっている [同上書: 119]。上記4店は大手であったが、何れも外国銀行の為替送金ネットワークを利用していたことが判る。

信局が、物理的に離れた地点間の金融取引に外国銀行を利用したのは、それが最も利便性に優れていたからである。安全面から言えば、手荷物運搬人の「水客」などと比較して迅速・確実であった。需給面から言えば、片為替になりがちな華僑送金では、信局が自店内で為替バランスを完全に均衡させることはほぼ不可能であった。加えて外国銀行は信用のある一部信局に、当座繰越による短期信用を供与するなどの便宜を図った [同上書: 113]

この結果、東南アジア 華南間の華僑送金では、信局と外国銀行の間に相互関係が形成されていった。それは組織的に遠隔地間を結び、安全・確実・大量の資金移動を担った「銀行」のマクロ・ネットワークと、同族・同郷・同業という地場に張り巡らされた伝統的紐帯に基づき、資金吸収を担った「信局」のミクロ・ネットワークの補完関係であった。

1910年代後半に入ると、華人資本の銀行業参入が本格化する。例えば、シンガポールの華人系銀行は、1903年に創業された広東系の「廣益銀行」を嚆矢とする。¹³⁾ 1907年には潮州系の「四海通銀行」が創業され、潮州系のネットワークに沿った形で香港、バンコク、汕頭に支店を展開した。1908年には中国の「交通銀行」が支店を開設する。1912年には福建系「華商銀行」、1917年には福建系「和豊銀行」、1919年には福建系「華僑銀行」が開業している。¹⁴⁾ この

12) 1870年代半ば、シンガポールでは政府が華僑送金を管理下に置くべく、華民郵便局を設置して介入しようとした。しかし、これは華僑・華人社会から既得権益への重大な侵害とみなされ、1876年に潮州系を中心とする大暴動へと発展した [鬼丸 2003: 508]

13) 「廣益銀行」は1913年に経営破綻・清算され、同年にクアラ Lumpur で再建される。

14) Rajeswary Brown は、香港上海銀行のシンガポール支店買弁が歴代広東系で占められており、福

3行は1932年に「華僑銀行」(OCBC)として合併する。¹⁵⁾1920年には「余仁生」の余東璇が「利華銀行」を創業している。

もっとも注意が必要なことは、シンガポールの華人系銀行が主力としていた業務は、同郷人脈のネットワークを基軸とした強力な預金吸収、さらにはプランテーションや鉱山への投融資であり、支店網もマレー半島を中心としていたことである。その意味でシンガポールの華人系銀行は、為替銀行の側面よりも、むしろ同郷人のための地域金融機関としての側面が強かった。無論、華僑送金を取り扱ったのも事実である。しかし実際には、既存の信局と外国銀行の送金ネットワークは強力であった。したがってシンガポールの華人系銀行は、自前の遠隔地間金融ネットワークを形成するよりも、むしろ信局と同様に外国銀行との提携で、その機能を補完していた。¹⁶⁾

III 多角的為替関係の中の華僑送金 商品貿易との関連を例に

各地の華僑・華人社会からの送金は、多くが華南に向けられた。この過程で特筆すべきことは、資金が市況の有利な際には商品貿易などの形態に転換されるなど、送金方法に多様性が見られた点である。例えばシンガポールの「余仁生」の場合、預かった資金を広東からの薬材輸入決済に当てることで、華僑送金と貿易決済を相殺していたと考えられる。またタイや仏領インドシナの場合、華南で需要の大きい米を現地で買い付け、香港で売却・現金化して資金を回収・転送することで利益を得た [濱下 1992: 103]

すなわち、華僑送金の複合取引は、需給バランスが悪く片為替となりやすい華南各地への直接送金と比較して有利であると同時に、信局業務を兼業する貿易商や商店には、利潤を極大化する機会であった。貿易商や商店は事業の運転資金を必要とした一方で、兼業する華僑送金は実際の支払いまでに郵便の関係上から1~2週間を要した。そこで受入資金を活用した運用をおこなった。¹⁷⁾例えば「余仁生」や「天一局」など、華僑送金以外の商品為替も併せて取り扱った業者は、一般商人の委託による為替取引も多く、前貸し融通などもおこない、常に20万~30万海峽ドルの資本を運用していた [台湾銀行調査課 1914: 101]

また華僑送金と商品貿易の関係は、地域間の経済関係に複雑な影響を与えた。例えば華南へ

↘ 建系に長らく不利益のあったことが、福建系の銀行形成要因の一つであったと指摘している [Brown 1993: 274]

15) シンガポール全体の銀行発展史に関しては Lee [1974] に詳しい。また OCBC の歴史に関しては、Wilson [1972] を参照。

16) 1930年代、シンガポールの華人系銀行は為替分野で、香港や中国の銀行と提携を強める。例えば華僑銀行は中国銀行と関係を強め、利華銀行は香港の東亜銀行と提携する。

17) 信用薄弱な小信局は送金を故意に遅延させて、運用可能な期間を極大化するケースがあった [台湾銀行調査課 1914: 101]

表2 香港からの米再輸出先（1914年）

広東	460万	(40.25%)	山東	44万5千	(3.89%)
日本	186万5千	(16.32%)	汕頭	37万5千	(3.28%)
米国	100万	(8.75%)	澳門	28万	(2.45%)
香港	99万	(8.67%)	南米	25万	(2.19%)
廈門	51万	(4.46%)	天津	14万	(1.21%)
マニラ	48万	(4.20%)	寧波	2万	(0.17%)
豪州	47万5千	(4.16%)	合計	1,143万	(100%)

出所：[外務省通商局 1917: 273]

注：1) 単位トン

2) 表中の「香港」とは、香港域内での消費を指す。

の華僑送金による資金流入は、同地域での輸入消費の原動力になると同時に、香港市場で商品貿易などに伴う多角的な為替関係を相殺する要因となった。以下では、広東の重要な輸入産品であった米を例に見る。

周知のとおりバンコクおよびサイゴン（チョロン）で、米の集荷・出荷をほぼ独占したのは潮州系であった。潮州系は同時に故郷への送金を必要としており、送金は先述のように時として商品貿易の形態に転換された。しかしバンコク、サイゴンなどから輸出された米は、最終需要地に直接送られることはなく、ほとんどが需給調整地の香港に向けて送付され、香港から各地へと再輸出された。外国・内国産品を問わず、輸入・移入品が一旦香港に入り、さらに各地に再輸出される図式は、近代華南の貿易関係の基本構造であった。

香港で米を受け入れたのは、潮州系などが主体であった「南北行」商人や「九八行」商人といった貿易商の中でも、サイゴン米やタイ米を取り扱った業者である。大手は、南北行では「元發」「萬發祥」「公源」「合興」「乾泰隆」「萬祥源」「寶興泰」「德昌」「榮發」、九八行では「炳記」「裕徳和」「集祥」「明順」「同泰興」などであった[東亜同文会 1917: 1001-1003]。彼らは米を広東系の間卸に売却して、利潤を極大化しながら現金化し、回収資金を潮州へ向けて送金した。

重要な点は、潮州系などによって運ばれて香港で売却された米は、広東系が掌握した香港広州の商業ルートに乗せられ、4割近くが珠江デルタを中心とした広東に再輸出されたことである。例えば、1914年の香港の輸入米再輸出先を見ると、表2のとおり広東向けが40.25%と圧倒的数量を示している。¹⁸⁾ ちなみに潮州（汕頭）向けはわずか3.28%にすぎない。これは潮州系の米貿易が、あくまでも利潤獲得のための手段に過ぎなかったことを示している。そして珠江デルタ流域圏で、米に代表される輸入物資の購買力源泉となったのは、東南アジア、米州、オセアニアに展開した広東系華僑・華人の華僑送金であった。

以上のように華僑送金は、異なる華僑・華人の系統間による産品貿易を伴うなど、アジア太

18) 米の輸出入高は需要・供給側の諸要因に左右されるため大きく変動するが、香港から広東向けが最大である点は一貫していた。

平洋の多角的な為替関係の中で、複雑な影響を与えていた。そして香港市場は、華僑送金をはじめとする広域間・地域間の各種為替を結節・転換・調整する、金融センターの機能を果たしていた。以下では、華僑送金に伴う香港の具体的役割をさらに考察する。

IV 香港の中継・分配機能

華僑送金の多くは、アジア太平洋と華南を結び、各地の為替需給が集積される金融中継地としての香港を経由した。

例えば、東南アジアから広東への華僑送金では、商品貿易形態、あるいは為替形態の何れも、「為替屋は南洋と直接に為すもの少なく皆香港に支店又は取引店を有するを以て一度香港に送金し更に広東へ取寄するが如し」[台湾銀行広東支店 1916: 145-146]、「南洋華僑の送金は多くは香港の香上、渣打、台銀、フランス銀行、花旗及支那銀行宛等にして直接省城銀號に向けて送金するもの少なし」[台湾銀行調査課 1919: 59-60]と言われた。すなわち東南アジアと華南各地の直接取引ではなく、外国銀行のネットワークを通じて香港で調整された後、各地方に強みを持つ各郷党の地場金融ネットワークを通じて、目的地に再送金された。香港はこのネットワーク間を接続するハブであった。

数量的に見ると、1913年にシンガポールから送出された華僑送金は総額2,000万海峽ドル、そのうち廈門宛が750万海峽ドル、汕頭宛が850万海峽ドル、広東宛が400万海峽ドルと推定される。この中で廈門宛の60%、汕頭宛のほぼ100%、広東宛の100%が香港を経由した[台湾銀行調査課 1914: 118]¹⁹⁾

理由は、次の2点である。(1) 為替需給の関係で、東南アジアから華南の地方都市に直接送金する為替レートより、一旦香港を経由して同地向けの為替レートを利用するほうが有利であった。また外国銀行は、為替需給の不均衡を嫌気して、華南の地方都市向為替より香港向為替の引き受けに積極的であった。(2) 商品貿易形態の場合、商品を売却して現金化するには香港市場が有利であった。

香港の重要性から、信局は為替を中継する自己店舗や聯号を同地に有した。1902年の統計によれば、44の業者と162人の配達人が香港政府に“Chinese Postal Hong”として免許税を納めて登録していた[HKG 1903: 138]。1913年の時点で、広東系では「余仁生」「三益」「廣利源」「泰源」「祥徳」「廣鴻泰」「逢源」「瓊海通」「瓊會安」などが著名で、特に「余仁生」「三益」が多額を取扱った[台湾銀行調査課 1914: 105-106; 1920: 39-40]。広東系信局は、広州など広東

19) 後に資金の受け取り側である僑郷(華僑の出身地)などで金融機関が発達し、また郵便網が整備されると、広東や潮州に向けた送金でも、海外から直接に為替手形や現金を送付することが可能となり、必ずしも香港を経由するとは限らなくなる。

各地に支店・聯号を設置したが、漢方薬商としても知られた「余仁生」のように、多くが貿易業者や商店の兼業であった。

潮州系や福建系でも、やはり「南北行」や「九八行」などの貿易業者が、華僑送金の為替中継店として機能した。1913年の台湾銀行の調査によれば、信局の依頼に基づき香港で為替を中継した商店は、次のとおりである。汕頭向け：「金成利」「元發」「順福成」「乾泰隆」「内南福」「裕徳成」「成順棧」「安昌（元生發内）」「振興棧」「添和成」「廣美盛」。廈門向け：「炳記」「聚徳隆」「建祥棧」「建源」「益記」「天成棧」「瑞記」「福生春」「啓瑞棧」[台湾銀行調査課 1914: 110]

中継店は「筆資」と呼ばれた手数料を信局から受け取った。その方法は年額固定や出来高払いなど様々であった。無論、汕頭向けは潮州人が経営し、廈門向けは福建人が経営していた。上記の中には、南北行の大手として著名な「元發」「乾泰隆」「裕徳成」「廣美盛」や、九八行の大手として著名な「炳記」「聚徳隆」が含まれているように、ほとんどが「南北行」や「九八行」などの貿易業者であった。

貿易業者や商店が信局の支店・聯号を兼ねた事実は、商品貿易と華僑送金の間の為替関係が、いかに密接であったかを明確に示している。これは同時に、香港での潮州系や福建系の金融が、伝統的な金融専門業者である「銀号」を形成して金融業界を確立していた広東系とは異なっていたことを示している。台湾銀行の調査には次のように記されている。

廈門、汕頭、福州等の沿岸各地に対する為替は其地方の錢莊の出張員を一名若くは二名位を当地に派遣し各自其の地方の取引に従事する知人商店の一室を借り受けて営業所となし為替の売買をなすものにして損益の決算も其本店に於て計算せられ全く代理店の如くにして其営業所も斯く小規模にして当地銀號の如く堂々たる店舗を張れるものなし。

[台湾銀行調査課 1920: 39]

したがって、香港での潮州系や福建系の金融業は為替中継が主体で、預金・貸付、両替、投機などを幅広く展開した広東系の銀号と比較した場合、その活動範囲は狭かった。

V 香港銀号業の役割 手形の買い取りと両替の掌握

東南アジアからの華僑送金は、商品貿易の形態をとることもあれば、為替送金や現金携帯の形をとることもあった。

電信為替の場合、東南アジアから送られてきた資金を、信局の香港支店や聯号が銀行で受け取り、各地に向けて再送金した。そして華南地方都市の信局や聯号は、現地の銀号や銀莊、外

国銀行の代理店で香港中継店宛の電信為替を売却し、資金を現金化した。

為替手形の場合、資金経路は複雑化する。一般に在東南アジアの外国銀行は、需給が一致せず片為替となりやすい汕頭や廈門などの地域に対する為替取組には消極的であった。むしろ外国銀行は、為替需給の均衡をとりやすい香港への為替取組には積極的であり、また需給の一致からレートも有利であった。このため東南アジアの信局は、香港支払の為替手形を外国銀行から買い取った後、(1) 香港の支店・聯号に送付する、(2) 送金目的地の華南地方都市に直接送付する、という何れかの方法を用いた。しかし、為替手形は香港支払であるため、(2) の場合、地方都市の信局は現地の銀号や銀荘で売却・現金化する必要があった。現地の銀号や銀荘は、買い取った手形を香港の聯号に送付し、多くが香港の銀号を経由して外国銀行に売却された [台湾銀行調査課 1914: 109]

香港で手形の買い取りと現金化を手掛けたのは、両替を主とする「找換銀号」と呼ばれた業者であった [朝鮮銀行調査課 1941: 30-31]。香港の銀号が華僑送金に伴う為替手形を買い取ることに関し、找換銀号の大手「昌記銀號」に勤め、後に「裕昌銀號」を興した林癸生は次のように証言している。

もともと当時は米国に渡った華僑が次第に多くなり、為替手形が故郷に送られるようになると、家族は香港に出てきて両替するか、あるいは江門などの銀号に売却した。しかる後に江門の銀号から香港に持ち込まれると、香港の銀号はこれらの為替手形を受け取り、銀号の印鑑を押してから香港の銀行で現金化したのである。²⁰⁾

この証言からは、為替手形が香港払いのため、必然的に香港で最終決済されるものであったが、一方で為替手形は先ず江門に送付されていることから見て、華僑送金のルートが一定でなく、むしろその都度に有利で利便性の高い方法が選択されていたことが判る。

香港に持ち込まれた為替手形は、銀号が買い取った後に、外国銀行に売却された。ところが為替手形の売買は、経路の複雑性から次のような問題をしばしば引き起こした。再び林癸生の証言を見ると次のようである。

これらの為替手形は、幾つもの経緯を経て香港に至るまでには長い時間がかかり、一部の内地の華僑親族は、さらにこれらの為替手形を現金と同じように長時間退蔵したため、現金化されるにはさらに時間がかかることがあった。香港の銀行が為替手形を外国に送る

20) 「原来，那時華僑到美國的漸多，把銀單或銀仄寄回家鄉，家人只有拿出来香港兌換，或者在江門等地銀號賣了，然後由江門銀號調來香港，本港銀號收了這些匯單或銀仄，蓋了銀號圖章就解售香港銀行」[金銀業貿易場 1970]

際には多くの問題が発生し、甚だしい場合は不渡りとなることがあった。この際、銀行は香港の銀号に対して遡及をおこなうが、香港の銀号が手形の経路を再追跡することは不可能であったため、錢怡や銀号は大きな損失を被った。²¹⁾

そこで找換銀号のギルド的な役割を果たしていた華人系金融取引所の「金銀業貿易場」では、1910年代後半に総理（理事長）を務めた林癸生を中心に同業の利益を守るため、金銀業貿易場の名義で在香港の外国銀行（当時13行）と談判し、為替手形期限の6カ月間有効に関する保証協定を結ぶことに成功した〔金銀業貿易場 1970〕

この他に找換銀号は、現金携帯形式での華僑送金に伴う両替にも積極的に関与した。²²⁾ 一流店では「永生」「恕隆」「昌記」「崇裕」「裕記」、二流店では「安泰」「建徳」「恒昇」などが著名であった〔台湾銀行調査課 1914: 154〕。交換可能な通貨は多岐にわたっていたが（表3参照）、これは専門業者の找換銀号でなければ提供できないものであった。

找換銀号の両替業務の様子を、台湾銀行の調査報告は次のように記している。

余が香港滞在中同地数軒の両替店を訪問せり殊に当日は南洋移民船到着当日なりしを以て狭隘なる店頭来客織るか如く一店四五人の店員忙殺せられ応接に違なきを實見せり其の繁昌意想の外にあり。〔同上書: 155-156〕

香港にありて同地両替店を訪問しつつある際偶々南洋より帰来したるものにして一人一千余弗の蘭領紙幣の交換を為せるを見たり同両替商の主人は曰く如斯は稀に見る所なるも一口一二百弗の交換をなすもの事実少なからず。〔同上書: 94-95〕

貨幣両替の種別出来高では、東南アジア紙幣、特にシンガポール紙幣が最も多かった。季節的に見ると移民船の往来が頻繁化する毎年1～3月、6～8月の需要が多く、1カ月平均で30万香港ドル、年間では360万香港ドルの両替がおこなわれたと推定されている〔同上書: 157〕。両替された各種貨幣・紙幣はまとめられ、レートが有利な時を見計らって外国銀行に持ち込まれるか、銀号の業者間市場「金銀業貿易場」で売却された。

以上のように香港の銀号は、為替手形の買い取りや多種にわたる両替に関与して、華僑送金を円滑化した。一方で、香港の銀号が東南アジアに進出し、現地で華僑送金の前段階から関与

21) 「因為這些銀仄，是幾經轉接才到香港，費時很久，有些國內僑眷，還把這些銀單當作金仔，收藏了很久，才調現款，於是時間就耽誤更久，本港銀行把這些銀單寄回外國去的時候，便發生很多問題，甚而退票。退票的時候，銀行便向本港銀號追究，而本港銀號再追究前途的時候，則沒有辦法了，於是錢怡與銀號，大受損失」〔金銀業貿易場 1970〕

22) 携帶送金で使用された主な紙幣・為替とその比率は、南洋紙幣45%、信局為替35%、銀行為替20%とされる〔台湾銀行調査課 1914: 95〕

表3 銀号で両替可能な通貨の種類

寶叻紙	シンガポール紙幣	什銀	各省鑄造雜銀貨
新宋紙	マニラ紙幣	花旗銀	米国銀貨
瓜亞紙	蘭領東インド紙幣	和蘭銀	オランダ銀貨
西貢紙	仏領インドシナ紙幣	勞啤銀	インド銀貨
一元西貢紙	仏領インドシナ1ピアストル紙幣	暹羅銀	タイ銀貨
日本紙	日本紙幣	港中銀	香港50セント銀貨
勞啤紙	インド紙幣	廣中銀	広東五十仙銀貨
暹羅紙	タイ紙幣	廣双毫	広東二十仙銀貨
廣省紙	広東紙幣	廣東毫	広東十仙銀貨
寶叻光	シンガポール銀貨	港双毫	香港20セント銀貨
新宋光	マニラ銀貨	港單毫	香港10セント銀貨
西貢光	仏領インドシナ銀貨	寶叻毫	シンガポール10セント銀貨
香港光	香港銀貨	新宋毫	新マニラ小銀貨
舊宋光	旧マニラ銀貨	舊宋毫	旧マニラ小銀貨
日本光	日本円銀貨	西貢毫	仏領インドシナ小銀貨
廣龍光	広東銀貨	足金葉	金を薄く延ばしたもの
舊光英	旧メキシコ銀貨	二一英金	英国1ポンド金貨
新光英	新メキシコ銀貨	二二美金	米国金貨
印日港	チョップ付日本円銀および香港銀貨	二二日金	日本金貨
廣印龍	チョップ付広東銀貨	一八舊宋金	旧マニラ金貨
花英	チョップ付旧メキシコ銀貨	一七和金	ジャワ金貨
舊銀	チョップ付銀貨		

出所：[台湾銀行調査課 1914: 155-156]

注：1) 1914年7月4日調べ。

- 2) 「二一」「二二」「一八」「一七」などの数字は、貨幣重量を両建て換算し略称としたものである。
 二二金(5ドル金貨)を例にとれば、重量129グレーン=0.2224両なので、切り下げて0.22となり、「二二」と称される。

することは決してなかった。銀号の活動は、あくまでも香港 珠江デルタ流域圏を基盤とした地理的範囲に留まるものであった。

VI 広東省内への為替送金

華僑送金の最終段階は、香港から華南各地への送金である。しかし経路・方法は一定ではなく、様々であった。例えば、珠江デルタ流域圏での資金移動の経路を見れば、香港から広州を経由して各地方に送金する場合もあれば、先述の江門の例のように、為替手形が地方に直接届けられる場合もあった。送金の担い手を見れば、信局の数は福建や潮州と異なり多くはなかったが、各地の銀号、貿易商店、配達人の「巡城馬」など、多様な業者が参加していた。また資金移動には、貨幣や手形の現送、銀号为替の利用のほか、銀号や華商の香港 珠江デルタ流域圏間での為替需給に応じた相殺決済も活用された。

以下では、シンガポール、香港、広州を経由した信局と銀号の送金を参考に、華僑送金に伴

う広東省内への為替を見る。

まず広州の信局為替の場合、東南アジアとの間の為替は、シンガポール、マラヤ、仏領インドシナとの間に限られた〔台湾銀行広東支店 1916: 144〕。信局はシンガポールや香港と同様に、ほとんどが貿易商店との兼業であった（表4参照）。具体的に見ると、シンガポール為替を取り扱った代表的業者の「余仁生」（漢方薬の輸出、取扱高年間400万）、「益棧」（反物輸出、取扱高年間200万）、「廣源」（煙草雑貨輸出、取扱高年間100万）、「謝悦和」（金細工輸出、取扱高年間100万）〔同上書: 144〕²³⁾などは、シンガポールとの貿易をおこなう「石叻荘」と呼ばれた貿易商店であった。1913～15年の台湾銀行の調査によれば、これらは年間500～800万の送金を取り扱い、その20%は商品為替であった。中でも「余仁生」は最大で、約50%のシェアを握っていた〔台湾銀行調査課 1914: 158〕

広州の信局では、東南アジアから香港を経由して資金と手紙が到着すると、方面別に整理した後、地方の聯号に送付するか、あるいは「巡城馬」と呼ばれた配達人を手配する。「巡城馬」は汕頭や廈門の「批脚」と同じく、第三者の依頼で書信、金銭、物品を運送する業者で、主に珠江デルタの水路を利用して地方都市や村落間を定期移動した。

一般的に送金で届く貨幣は、市内であれば広東紙幣、地方であれば二十仙毫子（小銀貨）が配達された〔同所〕。配達完了した際、受取人は「回批」（送金取組案内状の確認証）に判を押す。代表的なものは3枚続きで、受取人の捺印を取った後、1枚は自己保存し、1枚は取組店に送り、1枚は受取人に渡した〔台湾銀行広東支店 1916: 146〕。地方の聯号や「巡城馬」によって信局に回送された回批は、逆のルート、例えば広州から香港の支店・聯号を経由してシンガポールに回送される。シンガポールの信局は受取証明を依頼人に郵送するか、あるいは店頭で請求に応じて交付した。²⁴⁾

次に広州の銀号の場合は、同業間で構築した省内為替のネットワークを利用した。しかしその範囲は、通常取引のある銀号の地方、例えば江門、仏山、陳村、西南、清遠、韶關、梧州な

表4 広州におけるシンガポール宛為替の取扱店（石叻荘）

名称	司事	所在	年間取扱高	備考
余仁生	楊榮標	広東杉木欄	400万	雑貨織物輸出
益棧	黄作文	同 同	200万	反物輸出
廣源	郭伯棠	同 打銅街	100万	煙草雑貨輸出
謝悦和	馮取	同 小市街	100万	金細工輸出

出所：〔台湾銀行広東支店 1916: 144〕

注：「余仁生」は雑貨織物輸出となっているが、実際は漢方薬取引が主体である。

23) この他に4～5軒の小業者が活動した〔台湾銀行調査課 1914: 158〕

24) 保管期間は1年前後であった〔台湾銀行調査課 1914: 95〕

どに限られ、及ばない範囲では「巡城馬」などを使用した。銀号の省内為替レートは、香港
 広州間為替のように広州「銀業公所」の集中取引で決定されず、各銀号が独自に決定した〔台
 湾銀行調査課 1919: 68〕。理由は、地方によって嗜好される流通貨幣が異なったためである。
 台湾銀行の報告は次のように述べている。

為替手続に関して元來支那貨幣は各地其の成色重量を異にするを以て自国内と雖も毫も
 外国為替の場合と異なる所なく従て為替を取組まんとする時は先ず相互の為替平価を計算
 する必要あり為替手数料即ち匯水に至りては兩地間の為替出合の關係如何によりて^マ絶え
 ず変動すること外国為替の場合と異なるを見ず唯為替關係密接ならざる地方に対する匯水
 は別に公表することなく取組の都度之を決定するを以て此の場合銀號は往々不当の匯水を
 徴求することなきに非ず。〔同上書: 59-60〕

手数料は一般に広州からの距離で異なった。區季鸞の調査によれば、仏山や陳村などは100
 元ごとに約2～3元、江門は100元ごとに約3～5元、その他は100元ごとに7～8元であった〔區
 1932: 85〕。また台湾銀行の調査によれば、広東と取引の多い広西省梧州への為替送金は、
 1,000元につき22元、梧州から南寧までは1,000元につき50元を要したといわれる。²⁵⁾ 仕向地は
 広州を例にとれば、江門や仏山が多かった〔同上書: 85〕²⁶⁾

以上の信局と銀号の省内為替ネットワークは一例である。実際はその時々によって有利な経
 路・担い手・送金方法が選択されていた。

例えば、珠江デルタ下流域南西部に位置し、華僑送金の最終到着地の1つであった四邑（台
 山・新会・開平・恩平）や江門といった僑郷（華僑出身地）では、市場圏の地理的距離から、
 香港の銀号と直接取引がおこなわれていた。またこうした僑郷では、集積される資金が金融機
 関の発達を促し²⁷⁾ 香港の銀号による支店・聯号も村落部にまで達した。²⁸⁾ 例えば香港の著名
 商人である馬叙朝が経営した「五洲銀號」は、四邑系華僑の送金で有名であったが、香港本店

25) 広州 梧州間では、途中で土匪盜難等の危険が大きかった。南寧、梧州 広州間の為替は常に移出
 為替で、時期によっては広州の毫銀相場に大変動をもたらすこともあった〔台湾銀行調査課 1919:
 59-60〕

26) 広州と仏山および梧州の間の為替は、華僑送金より商品取引に伴う為替が多数を占めていた。例え
 ば広州は、佛山からは炮竹、紙、朱、鉛白粉、梧州からは桂皮、獸皮、木材、西南からは北江沿岸
 の醤油などを移入した〔台湾銀行広東支店 1916: 171-172〕

27) 山岸猛先生のご教示によれば、台山県僑務弁公室編『台山県華僑誌』（1992年）には、中華人民共
 和国建国前、台山に華僑送金（為替）取扱に力を入れた金融業務を行う私営銀行と信託会社が6軒、
 金舗および銀号が100軒以上あった。例えば私営銀行では嶺海銀行（1923年開設）、南中銀行（1932
 年開業）、県外の私営銀行支店では香港広東銀行台山支店（1924年設立）、広州興中商業儲蓄銀行
 （1928年設立）、五華実業信託銀行（1930年設立）などがあつたと記されている。

28) 「在四邑幫銀號為利便邑人計對於四邑較盛之鄉鎮均可通匯」〔區 1932: 85〕

や広州支店の他、四邑地方の台山三合墟と白沙舊墟、開平赤坎上埠にも支店を有していた [『馬叙朝档案』1932]

おわりに

19世紀後半から20世紀初頭、広東系の華僑送金の多くは、アジア太平洋の各地域を集積する「地点」に集り(前段階)、香港という為替中継地を経由して(中段階)、華南各地へ向かう(後段階)という資金移動を基本とした。本稿で取り上げた、シンガポールから広東の珠江デルタ流域圏へ向かった南北軸の資金流動は、その例である。それらの資金は、同じく広東系による米州やオセアニアからの華僑送金と共に、香港に集積され、目的地に仕送りとして送金されるだけでなく、珠江デルタ流域圏で消費される輸入物資の決済資金となり、あるいは広東域内や上海などに向けた投資資金となった。²⁹⁾

こうした動きは、先述のように華僑送金の一例に過ぎない。異なる系統・主体による華僑送金のネットワークは、異なる経路や方法、あるいは資金の役割を持ちながら、相互に交錯しつつ流動・循環していた。そして、この華僑送金に代表されるように、中国系社会の経済活動を1つの軸として、地域間の接続関係が構築され、その間で流動・循環の繰り返される「回路」が形成されたことは、近代のアジア太平洋経済圏を特徴付けるものであった。

現在、中国系社会の経済活動に伴う資金移動が、再び活発化している。例えば2002年、米国の大手金融サービス会社「ウェスタン・ユニオン」(Western Union)は中国市場に進出し、中国農業銀行や郵政局との提携によって、海外との間の送金業務を開始した。その目的に関して、ウェスタン・ユニオンの経営幹部は「推定5,000万人に上る在外華僑と中国の間の送金需要」にあると述べている [SCMP 2002]。このように地場の金融・郵便機関を窓口代理店として資金を集散し、外国金融機関の広域ネットワークを利用する資金移動は、かつての華僑送金の接続関係を想起させる。

無論、それはかつてのように東南アジアから華南への動きを基本とする訳ではなく、また華南系の人々を中心とするものでないように、地理的・内容的には変化している。さらに21世紀の現在、中国は再び開かれ、中国系社会の経済活動はアジア太平洋地域を超えて、世界経済の中でも大きな意味を持ち始めた。この中国系社会の経済活動を軸に、各種のネットワークが相互に結ばれる「回路」が再び姿を現す中、過去との連続性を伴いながら、新たな華僑送金の動きが流動・循環を開始しつつある。

29) 華僑送金がどのような形で利用され、現象をおこし、効果をもたらしたか、などの問題も取り組むべき課題である。この取り組みは次稿以降に譲りたい。

引用・参考文献リスト

日本語文献

- 朝鮮銀行調査課．1941．『中支より見たる香港金融市場と其の為替管理』東京：朝鮮銀行．
- 外務省通商局．1917．『香港事情』東京：外務省．
- 濱下武志．1990．『近代中国の国際的契機 朝貢貿易システムと近代アジア』東京：東京大学出版会．
- ．1992．「移民と商業ネットワーク 潮州グループのタイ移民と本国送金」『東洋文化研究所紀要』116: 61-106．
- ．1996．『香港 アジアのネットワーク都市』東京：筑摩書房．
- 久未亮一．2004．「華南・北米間の華人金融ネットワーク 19世紀後半から20世紀初頭まで」『年報 地域文化研究』7: 327-345．
- 鬼丸武士．2003．「阿片・秘密結社・自由貿易 19世紀シンガポール、香港でのイギリス植民地統治の比較研究」『東南アジア研究』40(4) 502-519．
- 杉原 薫．1996．『アジア間貿易の形成と構造』京都：ミネルヴァ書房．
- 台湾銀行調査課．1914．『南洋ニ於ケル華僑（支那移住民）附為替関係』東京：台湾銀行．
- ．1919．『廣東金融機関』東京：台湾銀行．
- ．1920．『香港金融機関』東京：台湾銀行．
- 台湾銀行広東支店．1916．「廣東之金融事情」『南支那南洋調査第七』台湾總督府（編），105-177ページ所収．台北：台湾總督府．
- 東亜同文会．1917．「第12編 貨幣金融機関及び度量衡」『支那省別全誌 第1巻 廣東省附香港澳門』東亜同文会（編），1035-1220ページ所収．上海：東亜同文会．

英語文献

- Brown, Rajeswary. 1993. Chettiar Capital and Southeast Asian Credit Networks in the Interwar Period. In *Local Suppliers of Credit in the Third World 1750-1960*, edited by Gareth Austin and Kaoru Sugihara. UK: The Macmillan Press Ltd; NY: St. Martin's Press.
- Hong Kong Government (HKG). 1883. Government Notification No.107 General Post Office. In *Hong Kong Administrative Report 1883*. Hong Kong: Hong Kong Government.
- ．1903. Report of the Acting Registrar General for the Year 1902. In *Hong Kong Sessional Papers 1903*. Hong Kong: Hong Kong Government.
- ．1932. *Historical and Statistical Abstract of the Colony of Hong Kong 1841-1930*. Third edition. Hong Kong: Hong Kong Government.
- Lee, Sheng-yi. 1974. *The Monetary and Banking Development of Malaysia and Singapore*. Singapore: Singapore University Press.
- South China Morning Post (SCMP)*. 2002. Western Union Eyes Cash Cow in China. August 25.
- Wilson, Dick. 1972. *Solid as a Lock: The First Forty Years of the Oversea-Chinese Banking Corporation*. Singapore: The Oversea-Chinese Banking Corporation.

中国語文献

- 區季鸞．1932．『廣州之銀業』廣州：中山大学法学院經濟調查処：再版，1971．台北：台湾学生書局．
- 金銀業貿易場．1970．「八十九高齡の元老林癸生先生憶述本場創辦經過」『六十週年紀年暨第二屆理監事就職禮 1910-1970』香港：金銀業貿易場．
- 林金枝．1980．「近代華僑投資国内企業的個別問題」『近代史研究』北京．
- 林家勁；羅汝材；陳樹森；潘一寧；何安拳（編）．1999．『近代廣東僑匯研究』廣州：中山大學出版社．
- 『馬叙朝档案』．1932．「広州市五洲銀號から馬叙朝あての書簡（中華民國21年1月13日）」香港：香港大学図書館所蔵．